

水中写真家と観察

銚子川 河口で 児童ら「ゆらゆら帯」

紀北町のきほくふるさど

(隆)さん(48)は和歌

と体験塾とNPO法人ふるさと企画舎主催の「銚子川・川ガキ養成講座」内山りゅうといく、ゆらゆら帯と銚子川の生き物編」が24日、銚子川河口であり、町内や尾鷲市、

山県白浜町在住の水中写真家。18年前に銚子川を初めて訪れ、昨年10月には海山公民館で開かれた「銚子川シンポジウム」の基調講演で銚子川の貴重さを訴えた。

愛知県から小学生と保護者ら16人が参加した。

参加者はJR鉄橋下の銚子川河口に集合。ふる

清流銚子川の保全を子どもたちに継承するのが目的。講師の内山りゅう

さと企画舎の田上至理理事長がヨモギを使って水中眼鏡の曇りを取る方



水中生物について説明する水中写真家の内山隆さん(24日、紀北町海山区小山浦の銚子川で)

法を説明。前日に川底に2個仕掛けたウナギを捕る竹製のもんどりにはウナギは入っていないかった。

参加者は内山さんの指導で潜り、水深約2層で比重が重い海水が下層に、上層に真水が重なる汽水域の「ゆらゆら帯」を観察。たも網でハゼの仲間之又マチチブ、マハゼ、ゴクラクハゼ、スジエビ、又マエビや内山さんが銚子川で初めて観察したというヒメ又マエビなどを採集した。

キャンブイン海山に移動し、内山さんが銚子川で撮影した生物をスライドで解説。貴重な絶滅危惧種のクボハゼが銚子川に生息していることなどを説明した。

田上理事長は「内山さんが『ゆらゆら帯は清流でしか見られないほど世界の河川でも貴重。外国人が見たらきつと驚くと思っ』と話していたことが印象に残った。メダカ観察で生物環境が分かることなども参考になった」と話していた。